



2020年1月号
(通算106号)
第1部

探見とは「ゆっくり歩いて、見て
聞いて、触れて、読んで、知ること。
そしてそのことを楽しむ」こと
故酒井憲一、編集発行人 森治郎

幸多い
2020年を
お祈りしています



絵 岡田 潤

創刊から10年目 今年もご愛読を
よろしくおいたします

『探見』発行幹事会

北天に輝く子の星（北極星）と巡る星々
富士山南麓十里木高原で森治郎撮影（午後八時から露出四〇分）



子の星（北極星）は探見の星

子の年は干支の最初の年。子の刻は1日の始まりの時刻。「子の星」もあります。その星は明るさとしては2等星ですが、天上第一の星として地上を見下ろしています。いや人々が見上げてきたというべきでしょうか。

「子の星」とは北極星のことです。日本の人々は長い間そう呼んでいました。地球から見ると、すべての星はこの星を中心に天を巡っています。どこにいても子の星の見える方角がほぼ真北。旅人は子の星に導かれ、夜の道を歩きました。子の星は人々に希望を与えてくれる星なのです。

24年前の子年の賀状に添えるために撮ったもので恐縮ですが、その星をお届けします。ときどきは北の空を見上げてください。北斗七星の柄杓の先端の2つの星の間隔を、柄杓の口が開いた方向に5倍延ばしたところ、日本国内であれば目を少し上げた程度の高さ（その土地の緯度とほぼ同じ）に必ずいてくれます。

望年会に 65 人 賑やかに、和やかに

2019年の望年会は12月7日（土）正午から、東京・日比谷の日本プレスセンタービル内のレストラン「アラスカ」で開かれました。出席者は65人でした。午前中に「前座」ツアーもあり、25人が参加しました。ともに賑やかに、和やかに、そして知ることの多い、楽しい時間でした。

【望年会ツアー】井伊家上屋敷～桜田門 時代急転の現場

小柳 和子（『探見』発行幹事） 前座ツアーは、「『桜田門外の変』の現場」でした。午前10時半に地下鉄国会議事堂前駅集合で、1時間ちょっとのミニツアー。生憎、寒くて天気が悪い。前日の天気予報では「東京地方に雪が降るかも」ということであり、大変心配でした。しかし不幸中の幸いというべきでしょうか、雪ではなく雨でした。それでも集合場所の東京メトロ国会議事堂前駅には定刻までに25人も集まりました。案内役はいつもの「大江戸まち探見」と同様、森治郎さんです。

駅を出て、傘を差しながら国会議事堂を左手に見ながら歩き始めます。雨の土曜日のため歩いている人はほとんどいません。私たちがすれ違ったのは、国会正門前での修学旅行生の集団だけでした。国会前の道路のイチョウ並木が黄色く染まり、雨に洗われてその色がますます鮮やかになっていました。国会正門前の信号を渡って国会前庭の北地区に入りました。

■彦根藩井伊家上屋敷…参謀本部・陸軍省を経て憲政記念館に

ここは江戸初期には加藤清正の屋敷であり、その後に彦根藩井伊家の上屋敷、明治以降は、参謀本部・陸軍省が置かれていました。現在は衆議院が管理する洋式の庭園となっていて、中に憲政記念館があります。元々は憲政の神様と言われる尾崎行雄（号堂）を記念する尾崎記念会館でしたが、それ



を母体に 1972 年に憲政記念館として開設されました。

尾崎行雄は明治 23 年の第 1 回普通選挙で衆議院議員に初当選し、第 2 次世界大戦の後まで連続 25 回当選し 60 年以上衆議院議員を続けました。この記念館の入口の池の中には尾崎の銅像があり、「人生の本舞台は常に将来に在り」という彼の言葉が刻まれた石碑があります。記念館の中には国会や憲政の歴史に関する資料などもたくさん展示されていて、とても興味深いです。しかし時間がないので、それらはまたの機会にとスキップし議場体験コーナーだけ訪れました。演壇や議席が国会さながらに再現されており、私たちは演壇に立つことも、議席に座ることも出来ます。議席には賛成・反対の票を投じる白札と青札も用意されていて、東の間の議員気分を味わうことができました。



■全国の「海拔」の原点が庭の一角に

憲政記念館を出て国会前庭北地区の公園内を歩きます。よく見ると両脇の木は桜です。ツアー参加者の 1 人が、「ここは桜の隠れた名所で桜のシーズンは本当にきれいですよ。」と教えてくれました。少し行くとローマ建築風の石造りの小さな建物が見えてきました。1891（明治 24）年に設置された日本水準原点が納められている標庫です。

日本の海拔は東京湾の平均海面を基準（海拔 0 メートル）としていますが、東京湾の平均海面の高さを地上に固定し、測量しやすくするために作られたのがこの日本水準原点です。ここを原点として各地の国道脇などにある水準点の高さが測られ決められているのです。そしてその水準点の高さ情報は、日本各地の河川や道路工事、下水道・鉄道などの工事に利用されています。どうしてここに水準原点を作ったかは明白です。地形情報はまさに軍事上の重要な情報であり、陸地測量部がその作成に当たり、同部を傘下としていた参謀本部が地図の原点として自らの敷地内に原点を設けたのです。またここは固い岩盤の上にあるので、地盤沈下の影響を受けにくいということもあったと思われます。標庫の基礎は地下 10 メートルの岩盤層までがっしりと築いてあるそうです。

■2度の大地震で「原点」は 11cm 沈下

現在、日本水準原点は国土地理院が管理しています。水準原点がどんなものか私は非常に興味があるのですが、残念ながら中は見えません。側にある案内板によると、建物内の台石に取り付けられた水晶板に目盛がついていて、その目盛ゼロのところが水準原点である。1891 年の設置当時の測量では、目盛ゼロの高さは海拔 24.500m でした。しかし 1923（大正 12）年の関東大震災で地盤沈下が起こり、再測量の結果 24.4140m に改定されました。さらに 2011（平成 23）年の東日本大震災でまた沈下が起こり、現在は 24.3900m に改定されています。つまり設置当初から 11cm 沈下しているのです。国土地理院のウェブによると、1 年に 1 回「測量の日」を記念して、この水準原点を一般に公開するそうです。また、この標庫の建物自体も素敵で、現在は東京都指定有形文化財でとっています。さらに文化庁の報道発表によると標庫は近日中に国の重要文化財になるようです。

■井伊大老襲撃現場「桜田門外」は目と鼻の先に

日本水準原点からお堀の方に下っていくと、そこに石囲いの井戸があります。江戸の名水「櫻の井」です。彦根藩井伊家の表門の外側にあった井戸で、当時、通行人の誰もがここで水を飲むことができました。安藤広重の「東都名所」でも人々が井戸から水を汲んでいる情景が描かれています。広重の絵をよく見ると、その井戸の奥に井伊家の表門が描かれています。安政7(1860)年3月3日午前9時頃、大老井伊直弼は上巳の節句の登城のためにこの表門から行列を組んで出てきました。この櫻の井の脇を通ったのでしょう。

そこから前方に桜田門が見下ろせます。私達も行列になって向かいました。距離は400m弱、ちょうど警視庁の建物の前の内堀通りで、(地下鉄桜田門駅の3番出口あたり)事件は起こりました。登城日なので大名行列の見物客がたくさんいて、その中に紛れ込んでいた水戸浪士らに襲われて井伊直弼は命を落としました。桜田門外の変です。襲撃者は18名であり井伊家の行列は総勢60名ほどで、人数的には圧倒的に井伊家の方が優っていました。しかし当日は雪が降っており、井伊家の供侍たちは雨合羽を着て刀の柄には柄袋をかけていたため咄嗟に対応できなかったとのこと。この事件後、時代は幕府瓦解に急速に向かっています。

■紅葉あざやかだった日比谷公園

桜田門外の変の現場を後にして、案内役だった森先生は約1キロ離れた望年会場のプレスセンタービルに急ぐためタクシーに乗車、私達は日比谷公園の中に入りました。小雨のためか公園は人が少なく、真っ赤の紅葉があざやかでした。雨の中でもテニスコートでは熱心にプレイしている人達がいまいました。私たちは公園をぶらりと散策しながら会場に向かいました。午前11時50分、開会10分前の到着でした。



【望年会本番】料理とお酒、紅葉、講話、ジャズ、交流… 世代を超えて楽しみました

杉田 真義 (大江戸まち探見アシスタント、早稲田大学3年) 私は昨年4月、サークルの先輩関根康太さんの後を受けてから朝日カルチャーセンター主催、森治郎先生案内のアシスタントとして参加させていただきました。数回参加し、様々な場所に行って、見て、学びながら毎回楽しい時間を過ごすことができました。普段歩いている東京の街でもまだまだたくさん知らないことがあり、いろいろな発見があって充実していました。そして、望年会にまで呼んでいただき、とても光栄です。

●2019年に逝去の方々への黙祷から

望年会の会場は霞ヶ関にある日本プレスセンタービル10階の「アラスカ」というレストラン。ウェルカムドリンクをいただいていると、前座ツアー組が団体に到着し会場がにぎやかになり、望年会気分が一気に高まりました。その時点で出席者は60人、最終的に65人となりました。



正午、森先生から「第8回『探見』読者望年会」の開会宣言があり、そして「今年は『探見』編集人だった酒井憲一さんや発行幹事だった佐々木昭次さんが亡くなりました。そのほか個人的に大切だった方数人を失いました。皆さんも同じだったのではないのでしょうか。こうした会では異例ですが、その方々のご冥福をまずお祈りしましょう」とのことで30秒の黙祷から始まりました。

ドーム状の天井で知られるレストラン「アラスカ」

●「『探見』はメディア界の地酒。個性的な味を大切に」

乾杯の音頭は朝日新聞アエラ発行室で森さんと一緒だった岡村徹さん。岡村さんはエージシュート、ホールインワン、それぞれ2回達成のゴルフの名手で、4月号にその体験記を書いておられます。海外でのゴルフ経験も豊富で、乾杯の前に「どんなスポーツでも競争なので勝敗を意識することも大切ですが、やはり自分が楽しめるか、一緒にプレーしている人と楽しめるかということを重視するのも必要」「何事も狭い視野に捕われることなく、広い視野を持つと様々な学びや出会いがある」というお話から、「お酒はいまや大量生産の銘酒より、それぞれ独特の味を持った地酒の時代。『探見』はいわばメディア界の地酒です。個性的な味を大切に、来年もファンを増やして下さい」とのご挨拶がありました。乾杯の後は全参加者の集合写真撮影。60人以上もいるのでなかなかの迫力です。

しばらく歓談です。当日の天気は、午前ほんの少し雨が降りましたが、午後はどんよりとした曇り空ですが、雨は上っていました。少々薄暗かったのですが、窓の外には色づいた日比谷公園のイチョウを一望でき、都心のビル群の中にある黄色が美しく映えていました。とても眺めが美しかったです。

そんな景色を眺めながら美味しいお料理とお酒をいただきました。お料理は生ハムやローストビーフ、カレーライスなど様々。飲み物もビール、ワイン、ジュースなど種類が豊富で選び放題でした。大学生が普段行けないような高めのレストランです。味も見た目も文句なしで最高でした。また、お酒も格別でした。普段は安いワインしか飲んだことがなかったので、ワインを美味しいと思ったことはなかったのですが、アラスカでいただいたワインは非常に美味しかったです。美味しさのあまり何杯も飲んでしまいました。

●映画「お百姓さんになりたい」監督さんが登場

途中で、ドキュメンタリー映画「お百姓さんになりたい」の監督原村政樹さんの講話を聴きました。埼玉県三芳町の「明石農園」で若者、障がいのある人、男性、女性など様々な人々が農業に携わり、生きることを学んでいく姿を追った作品です。『探見』10月で原村さんが書かれています。さらにくわしいお話です。農業といえば若者からは遠いイメージがありました。しかし、映し出された予告編の中では私とほぼ同年代、それよりもさらに若い多くの人たちが野菜を育てている姿がありました。また、野菜は不揃いではダメで「欠陥品」として捨ててしまい出荷しないという印象があったのですが、原村さんは不揃いが当たり前の自然の姿であると話され、そこから人間もおなじく不揃い、一人一人違って良いのだと説かれました。

●まだまだ聴いていたかったジャズ演奏

続いてはサクソ高橋三雄さん、ピアノ・ボーカルの古川奈都子さん、ベースの小林真人さんによるジャズ演奏です。街中や店内でよく流れている有名な曲をたくさん演奏してくださいました。ジャズの生演奏を聴くのは初めてだったので、いい機会でした。サクソの音色はきれいかつ迫力がありました。驚いたのは古川さんの歌声です。ピアノを弾きながら、あそこまでの音量を保って歌えるのは「さすがプロ！」と感激。連続30分の演奏でしたが、まだまだ聴いていたかったです。

演奏が終わると、森先生から「笠木和子さん、ちょっとお立ち下さい」と呼びかけがありました。笠木さんが立ち上がると先生から「女性のお年のことをいってはもうしわけないのですが、事前にお許しいただいているので明かしましょう。91歳で、多分本日出席者のうちの最年長者です。鎌倉から会場一番乗りでした。そして実は今演奏された高橋三雄さんのお姉さんです」と紹介があり、「弟さんの演奏を聴かれた感想はいかがですか」という質問に、「空襲のときおぶって逃げたその子がねえ。成長したものです」と答えられ、会場は爆笑です。78歳の高橋さんも笑っておられました。ちなみに最年少は、森先生の大学院での教え子の方に連れられた2歳のお子さんでした。

そしてしばらく歓談の時間です。会場のあちこちで、料理、お酒、デザートのコーヒーとケーキを楽しみながら世代を超えて話に花が咲いていました。2歳とおばさんたちも仲良くしていました。

●締め言葉は「『素敵な地球人』をめざしましょう」

最後は3月号に「『素敵な地球人』になることの大切さ」を書かれた北里環境科学センター理事長の伊藤俊洋さんのお話、閉会挨拶です。「おかげさまで、この師走にゆったりと料理、お酒、ジャズ、お話を楽しみ、至福のときを過ごさせていただきました。私はもともとは生化学分野の研究者でしたが、現在は宇宙生物学を専門にし、宇宙から地球を見て地球の生物、それを取り巻く環境に何が起きているかを考えています。よい環境を作るためにどうすればいいかを考え、行動することが素敵な地球人になることにつながります。その素敵な地球人になるために来年もぜひがんばりましょう」というお話に、たくさんの拍手がわきました。

プレゼントもありました。あらかじめ配られた紙に自分の名前を書き、帰り際に投票ボックスに入れ、後で抽選で当選者が決まりました。高橋三雄さんが吹き込まれたジャズCD2枚と読者の片岡力さんが企画された『江戸東京透視』3冊のプレゼントです。私は残念ながら当選できませんでした。当選された方々おめでとうございます。来年が皆さんにとってよい一年となるよう祈りながら望年会は終了しました。

今回このような大規模な望年会に初めて参加しました。お料理、お話、生演奏と盛りだくさんな内容であつという間に時が過ぎてしまいました。今年「探見」に参加し、みなさんには大変お世話になりました。来年もぜひ参加したいです。来年を望む会。忘年会とは違い、未来志向なとても良い会でした。みなさん、良いお年を！



トサクソ奏者高橋三雄さん率いる
トリオがジャズの名曲をたっぷりと

1968年12月19日 日本隊が南極点に到達した日

星条旗の立った南極点に到着する日本隊。花開いていた（1968年12月19日、柴田鉄治撮影）
 ここでは国際協定の精神が



日本の第9次南極観測隊の村山雅美隊長ら11人の「極点旅行隊」が、南極点に到達したのは、1968年12月19日である。実はこの旅行隊を南極点で出迎えようと、私が米国隊に頼んで南極点に降り立

ったのは、その前日の18日だった。

私はその2年前、第7次観測隊の同行記者として、南極を訪れ、1961年に発効した南極条約の素晴らしさに惚れ込んでいた。南極条約とは、第1条で軍事利用の禁止をうたい、第2、3条で科学観測の自由を、第4条で領土権の凍結を、第5条で核実験や核廃棄物処分の禁止などをうたったものだ。

南極条約そのものは、米・ソが互いに「南極に軍事基地を作るられたら困る」という相互不信から生まれたものだが、出来上がったものは、人類の理想を実現する条約となった。

私が同行した第7次隊は、まだ米ソの対立が厳しい時代だったが、昭和基地の東隣りにあるソ連のマラジョージナヤ基地を訪ねたとき、大歓迎をしてくれただけでなく、観測船「オビ号」の船員が、10年前、氷に閉じ込められた「宗谷」を救出した際にもらったという感謝状を「私の宝物です」と見せてくれるなど、実に友好的だった。

南極点に基地を創った米国隊の親切さも驚くほどだった。極点旅行隊の出迎えも、私だけでなくNHK、共同通信の3人に許可し、旅行隊の上空まで飛んで取材に協力までしてくれたほどだ。

南極点は、米国の基地から1キロほど離れた雪原にポツンと星条旗が立っている場所だ。雪原自体、海拔2800メートルもあって、そこにいきなり降り立ったNHKの記者は、高山病にかかって肝心の到着場面を撮影できなかった。それに同情した日・米両隊によって、翌日、到着場面を再現させて撮影するところまで協力してくれたのだから驚く。

南極点一番乗り競争は、1911～12年にノールウェーのアムンゼン隊と英国のスコット隊によって展開され、アムンゼンが勝利し、スコット隊は帰途に全滅してしまった。

英国人は「南極点に一番乗りしたのは、アムンゼンではなく、犬ぞりのイヌだ」と言って悔しがったが、最後まで助け合ったスコット隊の立派な日記が見つかり、いまでは南極点の米国基地にも「アムンゼン・スコット基地」という名前が付いている。（元朝日新聞科学部長、社会部長）

編集部から：南極は南氷洋に囲まれた5番目に大きな大陸。約1400万km²の面積は、オーストラリア大陸のほぼ2倍に相当する。約98%は氷で覆われ、その厚さは平均2000mあり、平均海拔は各大陸中

最も高い。

各国からの南極をめざしての「探険」「冒険」は20世紀初めまで散発的に行われ、日本からは1910年に白瀬矗（のぶ）隊の挑戦があった。そうしたことの頂点がアムンゼン隊の極点到達だった。第2次大戦後は、「科学調査」の対象として考えられるようになり、日本からは1956年に第1次観測隊が南極観測船「宗谷」で南極へ向かい、昭和基地を開設した。以降、みずほ基地、あすか基地、ドームふじ基地などの南極観測基地を建設して気象観測や電離層観測、海底地形調査、海洋物理・化学観測、測地観測などの研究観測を行なっている。

観測隊の「アシ」となっていたタロ、ジロが観測隊の日本帰還にあたって悪天候による輸送力低下で他の犬とともに昭和基地に置き去りになったのは1957年12月、そして2頭の奇跡の生存がわかったのは次の観測隊が基地に到着した翌々年1月14日のことだった。

「広報」とは言葉や化粧で飾ることではない

山見 博康（広報・危機対応コンサルタント）

1968年に大学を卒業、神戸製鋼に入社し人事や鉄鋼販売を経て79年から主として海外と広報部門を歩き、早期退職した後2002年に広報・危機対応、マーケティングに関するコンサルティング会社（山見インテグレーター〈株〉）を設立し、コンサルティングのほかセミナー講師や執筆活動をしています。

09年に出版した『広報・PRの基本』（日本実業出版社）が、うれしいことに毎年版を重ね、今年11日に新装改訂版として再度世に出ることになりました。この機会に私の広報に関する考えとそれを広めるために開塾した『山見塾』への想いを御紹介したく存じます。

本や塾は現役ビジネスパーソンが対象で、『探見』読者の中になんかなりいらっしゃるとお聞きしていますので、そうした方のお役に立てばという思いと、それ以外の方々にも生活の各場面でお役に立つのではないかと考えてのことです。



1. 何故知名度を上げ、よりイメージを良くする必要があるのか？

(1) 会社にHero, Heroinがいたら？

「大谷翔平って知ってる？」「勿論！」と今や野球を知らなくても世界に知れ渡り、チームも「大谷のいるエンジェルス」となります。同僚は喜び、地元の人々は誇りを抱く。この現象はどんなHeroでも、どんな場所でも当てはまります。

そんなHeroやHeroinが自社に居たら？ 社員は喜び、誇らしい。自信も出来ます。自律心が芽生え、良い商品を作ろうとし、喜ばれるサービスを提供したくなります。顧客や取引先・社会の人々も喜び、誇りを抱くでしょう。誰もがHero・Heroinに夢・憧れを抱くのと同じです。

但し、それも報道されて初めて判ること！しかし、何でも報道されるわけではありません。ビジネスの世界で良い記事、喜ばれる報道というのは、優れた経営活動によって社員の躍動から産み出される顧客や社会に役立つ製品であり然るべき業績あつてのことです。

小手先ではダメ！ 言葉で飾り、化粧が過ぎるといつか必ず暴かれます。今やネットで一瞬に！で



「広報の役割とはどんなことだろうか」山見塾では半年かけて考えます

利するのです。

「“そこそこ”でいい」と広報の努力を怠る社長、軽視する幹部や社員は次の3つのチャンスを逸していることを肝に銘ずべきです：

1. 説明責任を果すチャンス
2. 顧客増、売上増のチャンス
3. 人に喜び・誇り・自信・社会的責任の自覚から芽生える自律心を与えるチャンス

それは2つの重大な背任行為です。

広報の軽視は、怠慢・傲慢！

広報の無視は、不作為の罪！

逆にいうと広報の重視は「義務・使命」なのです。経営者も社員も、このような義務・使命を十分に果しているのか？を自省しましょう。

ローマ皇帝で哲学者マルクス・アウレーリウスは、「或ることを為したために不正である場合のみならず、或ることを為さないために不正である場合も少なくない」（神谷美恵子訳・岩波文庫『自省録』）と“不作為の罪”を戒めています。

2. 自分と会社を一致させよ

(1) 理想的健康経営の手本は、ビジョン・哲学の心を抱くトップアスリート

人は、指先の情報で脳が判断し、脳の情報で指先は動く。神経や血液が詰まり、脳の情報が増えれば指先は「壊死」し、末端情報が詰まれば「脳死」に近づく。メタボ状態を考えるとよく分ります。

つまり人は情報（血液・神経）で生きている。脳の情報に基き指先は善行もすれば悪行もやる。正しい指令なくして善行なしです。

会社は法“人”。トップは脳、社員は指先。骨格が組織、各関節に管理職が陣取ります。すると脳死壊死の関係は人と同じです。正しい情報が直ちに脳に届けば正常な判断が下せます。トップの考えが正しければ社員も正しく言動し、緩めば社員はもっと緩みます。誤ればさらに誤るのです。つまり、不祥事を起こす企業は、早くから血液が滞り、神経が次第に麻痺していく何らかの重い病気を患っているとみなすことができます。

決して情報を滞らせてはなりません。

「広報とは、ビジョン実現に向けて、“内外への”適宜適切な情報交通で会社を「司^{つかさど}り、それによって真（まこと）の人間＝真の会社へと導く永続的経営活動である」が本質です。

そこで健康なアスリートのように、会社も「ビジョン・哲学の心を持つ柔軟で鋭敏・敏捷な身体を

す。

(2) 広報は義務使命

ビジネスの最小単位は行商人と同様、「仕入れ」→「価値作り＝商品化」→「報せる」→「売る」→「代金回収」→「再投資」です。しかし、「商品化」から「報せる」なしに「売る」に行きません。顧客に適宜適切に報せる能力が顧客増を促し、その優劣がライバルとの競争に勝

備えた組織体」が理想的であり、そして目標を持ったアスリートが日々鍛錬するのと同じく、この健康を向上発展させようとする日々の実行が文字通り健康経営なのです。

常日頃、運動不足で鈍感になった人が「火事！」で直ぐ逃げられる訳はない！ 普段の心構えと備えなき企業が危機時に適切な対応ができないのは当然です。

(2) 長期的継続的観点からの広報活動循環プロセスを理解しよう

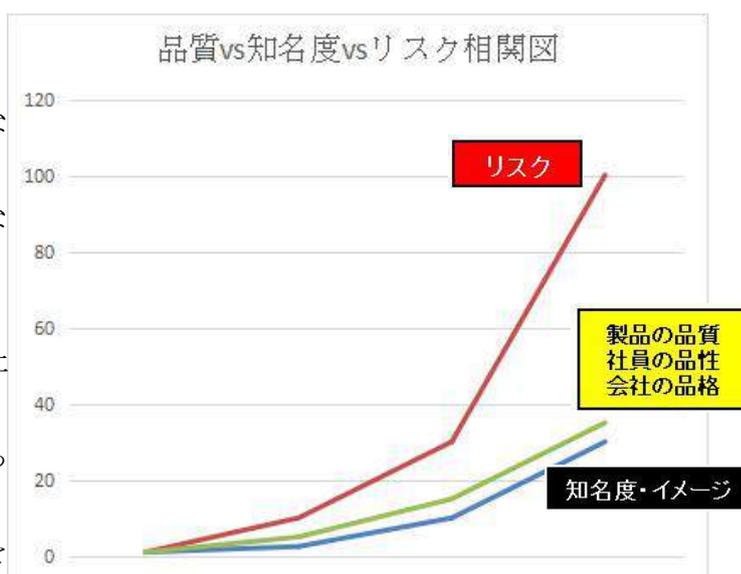
一つの良い記事が出ればそれに関連する人達は、大いに喜び、誇りを感じます。それが重なれば自信と誇りを抱き、責任感も向上し社会的責任の自覚を持つようになります。“〇〇の社員たる者はかくあるべし”と自律心が芽生え、ビジョンや行動規範に則って言動します。家族や子供まで周りの皆が喜び、誇らしい気持ちになります。その結果、顧客や社会に役立つ仕事を自発的にするので、顧客が増え、売り上げが伸び、会社は成長発展する…という循環プロセスを回しましょう。つまり、真の広報活動とは次のプロセスへと続いていくスパイラル的循環なのです。

3. 知名度向上の何倍でのリスク増大を恐れ、それに備えよ！

無名のラーメン屋がテレビに出た途端に、行列が出来る程になって時代の寵児のようにもてはやされていたが、数か月後、1年後にはどうなっているのでしょうか？ 昨年もある会社が特別な「オーダースーツ」を発表し、大いに話題になったのですが、何か月待っても個客の手許に届かず！ つまり、オーダーされたスーツは製造できずに撤退が発表され、信用信頼が失墜し、社長退任になったのは記憶に新しく、有名になっても、品質が劣り顧客満足から程遠ければ、たちまち滑落する典型的な例といえるでしょう。

即ち、知名度上昇の何倍もの「リスク」増大を常に恐れ、製品&社員両方の品質向上促進の仕組みとその下落監視・阻止・改善体制を構築すべきです。

「製品の品質」と「社員の品性」そして「会社の品格」の「三つの品（ひん）」が常に高度化し、その進化深化に比例して知名度が向上していくプロセスが理想です。製品・人・会社の三位一体の高度化が先導して、知名度が後を追っていく姿です。



4. 指先での不祥事を即座に正す！

人が指を切ると「血小板」が直ちに集合して止血する。傷口から悪い菌が侵入すれば間髪入れずに「白血球」が出動して即刻退治する。ところが彼らがさぼり、見て見ぬ振りをするとうなるか？は明白です。

よい血（情報）は漏れ続け、悪い菌（悪い人間や慣行）はのさばり蔓延する。そこで常に指先（社員）の動向に気を配り、ちょっとした過ち・少しの不具合でも即座に正す人物を育てることが、まさに経営の使命なのです！

【大戸屋バイトテロ事件】

昨年3月4日居酒屋チェーン「大戸屋」でバイト従業員が起こした不適切動画配信事件に対し、会

社は12日に1日一斉休業して社員教育を行う！と記者発表しました。夕方、私は日本テレビから電話取材を受け率直にコメントしたところ、翌朝8時の番組でコメント内容が取り上げられました。上記の原理に照らせば、「大戸屋バイトテロによる不適切動画配信事件」の本質は、“動画配信”ではなく、撮影現場で“誰も咎めなかった”つまり“白血球がさぼった！見て見ぬ振りをした！”ことなのです。

NHKの日曜午後7時半からの「ダーウィンが来た！」の生き物達が外敵から身を守る間断なき注意・防御姿勢を見習いましょう。不適切な電話対応やあるまじき態度一つを直ちに断固注意しあう敏感なしかも厳格な社員を育てていく。そんな風土醸成が経営の責任であることを自覚すべきです。

5. 『山見塾』開塾。我が広報思想の理解者を増やしたい

私の広報思想は、“メディア対応を巧くやる”ことではなく「真（まこと）の社員作り」＝「真の会社作り」です。広報の本質を学ぶことは仕事の考え方や進め方や人と人とのコミュニケーションの真髄を学ぶことです。このような思想を網羅して、『広報・PRの基本』の内容を充実し、70ページ増で今月『新版広報・PRの基本』として世に出ます。

日頃正しく生きる人は間違い難いし、たとえ誤っても適切な対応を取る・・・会社も同じ！正しい会社・社員は、いかなる事態においてもよりの確適切な言動をとるでしょう。

私は、このような我が思想の理解者を増やすことがより社会のお役に立てることと思い、昨年4月『山見塾』（主催：〈株〉VALCREATION）を開塾しました。毎月第3木曜日1回2時間（19-21時）×6か月コース。定員10名と少人数の塾生が半年で“広報の本質”を理論的に学び、随時行うワークショップでの実践体験を通じて業務全般を一通り身に付け、塾長の分身として社会に散り、永続的に敬愛される企業の礎を作る人物を育てようという思いからです。塾生はこの半年間メールや電話でいつでも塾長に個別相談できるし、毎回終了後有志での懇親会において、①記者はどんなネタに興味持つか惹かれるか？ ②取材したくなる会社になるには？など具体的なテーマを議論したり、塾生同士の交流も促進しつつ、この場でも相談に乗っています。

加えて、偶数月に3回メディア幹部や記者をゲストに「メディア懇談会」も開催しています。①記

広告



.....
うちの御用聞き家工房は生活のお困りごとをまるっと解決する地元の縁の下の力持ちです！



100円(税別)



100円(税別)



500円(税別)



500円(税別)



4,000円(税別)



5,000円(税別)



9,000円(税別)



10,000円(税別)



うちの御用聞き家工房



0120-936-931



<https://iekobo.net/>

者とは？ ②記者との付き合い方 等々について質問し深掘りするリアル懇談会です。

第1期19年4～9月は塾生10名で盛会の内に修了、去る10月第2期も10名でスタートし、今年3月に修了します。

『山見塾』では、広報の本質はもちろん、人間としての有り方・ビジネスの姿勢をも学べますので一生のお役に立てるでしょう。経営者や広報初心者・経験者にお勧めします。この塾での学びを通して、「私の言動が、〇〇（自社名）です」と言え、「真（まこと）の社員」、つまり自分が自社を代表している！との力強い自負心と誇りを持つ社員が増えることを願っています。

探見伝波 3度の臨死体験と最後のミッション「Stop the 幼児虐待」 釈静智

皆さんは臨死体験をしたことがありますか？

私は76歳になったばかりですが、臨死体験を3度しました。ここ3年の間で2度もです。

最初の臨死体験は赤ん坊の時。肺炎でほぼ助からないと言われた母は祈祷師に頼んでこの世に私を連れ帰ってもらい、新しい名前を付けて命を繋ぎ止めたのだそうです。それを入れれば4度ですが、自分に記憶がないので数に入れないことにします。そのため1度目は小学5、6年生頃海で溺れた時ということになります。

2度目は今から3年近く前の2017年1月14日の出来事です。肺炎で入院中に容体が急激に悪化したため、人工呼吸器のある大学病院へ救急車で搬送されました。病名は急性間質性肺炎。臨死の時ははっきりと見たヴィジョンを絵にして個展を開いたのが、この世に戻されたその年の秋のことでした。

3度目が今年2019年4月1日。心臓を止めて人工心臓に繋いで行われた僧帽弁閉鎖不全症の手術の時です。またまた戻された記念として本誌11月号で紹介していただいたように11月12日～18日の間銀座で個展を開きました。

一方、なんとという奇跡でしょうか、昨年1月に18年待っていて諦めかけていた初孫が生まれました。私は孫にも出会えたのです！私が再々度この世に戻されたのは、この孫のためにも最後にやるべきミッションがあるのではないかと。そう思っていたところ、親や大人たちが幼児を虐待し死なせてしまうというニュースが立て続けに流れました。こんな事があってはならない。させてはならない！虐待され殺された幼子達はさぞ怖くて苦しくて痛くて辛かっただろうに。私として出来る事はないだろうか？公民ともいろいろな団体・機関が支援活動をしているが、そういう活動は多ければ多いほど良いはずだ。そこで思ったら行動する事に。今回の個展の売り上げ、協賛金を原資として任意団体「Stop the 幼児虐待 略称SYG」を立ち上げて提唱することにしました。

活動目標は今年5月5日の子どもの日に「幼児からの人権宣言」を発信したいと考えています。長期的には、社会システムとして虐待防止に関わる法整備の充実化を公的機関に働き掛けたいと思っています。@



訪れた客に絵の趣旨や技法を説明する釈静智さん（後ろ姿）
銀座銀座すずらん通り「ぎおん石四階ギャラリー」で



ブータン製の紙を表と裏を2枚重ねて滴し込み技法で着色して偶然に浮かんだ顔絵。この絵の幼児の顔は左半分は泣いていて、右半分は怒っています

私は15年前から10年間カンボジアのシムリアップで内田弘慈さんたちが設立した孤児院だるま愛育園を通じて井戸掘り事業を支援してきた後、5年前からはパレスチナ子どもキャンペーンを通してパレスチナ難民の子ども教育支援をしています。新しいミッション「Stop the 幼児虐待=SYG」をぜひ応援してください。

問合せ先：SYG 事務局長 若松常正 wahsan206p2@ae.auone-net.jp

〒176-0023 練馬区中村北 1-11-6-2107 090-8724-7276

大前純一さんの「魚沼報告」が朝日新聞社「旧友会報」誌面に 本誌の昨年11月号に掲載の大前純一さん執筆の「米どころ魚沼で見る『農の異変』」が、昨年12月発行の『朝日旧友会報』に、『探見』の記事としてそのまま引用紹介されました。同会は朝日新聞社東京本社での勤務経験がある元社員たちの親睦団体で、約1300人の会員がいます。大前さんや私も会員です。大前さんと同じように「農の危機」に関心を寄せている人も多く、今後大前さんとの情報や経験交換が進むと思われます。それもまた「探見活動」の広がりにつながるのではないのでしょうか。（本誌編集発行人・森治郎）

探見活動への寄付金 60 万円、残高 45 万円を今後の活動資金に 昨年5月号と6月号で『探見』と探見活動充実のためのご寄付をお願いしたところ11月末までに59万2800円をお寄せいただきました。8月10日の歌舞伎観劇後の懇親会残金もいただき、総額60万574円となりました。支出は12月末までで15万2543円で、2020年以降の活動資金として44万8031円が残りしました。

支出の主なもの、7月6日の「太田道灌が駆けた関東の初期戦国時代」講演会と12月7日の望年会補助計11万5647円（使途は講師・演奏者御礼、会場使用料の補助）、ほぼ毎月実施の『探見』発行幹事会の出席者への交通費補助3万2000円でした。

昨年は寄付によるサポートを受けての活動はソロリソロリでしたが、今年はエンジンを「全開」させたいと考えています。読者の皆様からも「こんなことをやたらどうだろうか」「こういう使いみちがあるのではないか」という提案をお寄せいただくようお願いいたします。そしてそうした活動に積極的に参加していただくことも。

もうひとつお願いがあります。本誌に「おもしろい話」「楽しい話」「役に立つ情報」を、ぜひお寄せください。できればお書きいただきたいのですが（薄謝あります）、お教えいただくだけでも結構です。よろしく願いいたします。（本誌発行幹事一同）

発行後記 本誌第2部「キョウイク（今日行く所がある）とキョウヨウ（今日用事がある）のすゝめ」のウリは、ウオッチしている施設の多さです。対象施設は、2014と15年に読者有志が取材し発行した『行ってみよう！ 見てみよう！ 文化施設探見』東京都内23区版と都内市町村版のデータが基になっています。そこに収録された500の施設にプラスして、首都圏にも網の目を広げています。そしてもう一つ、「入場料は無料か、高くても600円以内（消費税8%時代は500円）」を原則にしていることです。こうした「ふところへの優しさ」重視は、読者に多い「年金生活者」重視ということでもあります。

その編集作業は発行幹事の1人がやってくださっていますが、私もお手伝いしています。作業を通じて感じることは、「生みっぱなし」にされている施設が、かなりあることです。1年中同じ展示で、その更新がないのです。予算の関係かもしれませんが、多彩な展示と展示替えをしているところも多くあります。行政や企業トップと担当者の工夫と情熱次第で、かなりの改善ができそうです。ことしはそうした「努力の積み重ね」をたくさん発見して、皆さんに有用な情報をより多く紹介したいものです。（も）

探見1月号（第106号） 2020年（令和2年）1月1日発行

編集・発行所 160-0006新宿区舟町13-6 森治郎方

j.mori@kurenai.waseda.jp、携帯電話 090-4538-3834、ファクス 03-3359-3354